ご飯のケーキ

益川 知実［千葉県］

当時、小学5年生の息子と1年生の娘をかかえたシングルマザーの私は、資格取得を目指し週に数回、子供たちに留守番をさせて夜間スクールに通っていました。

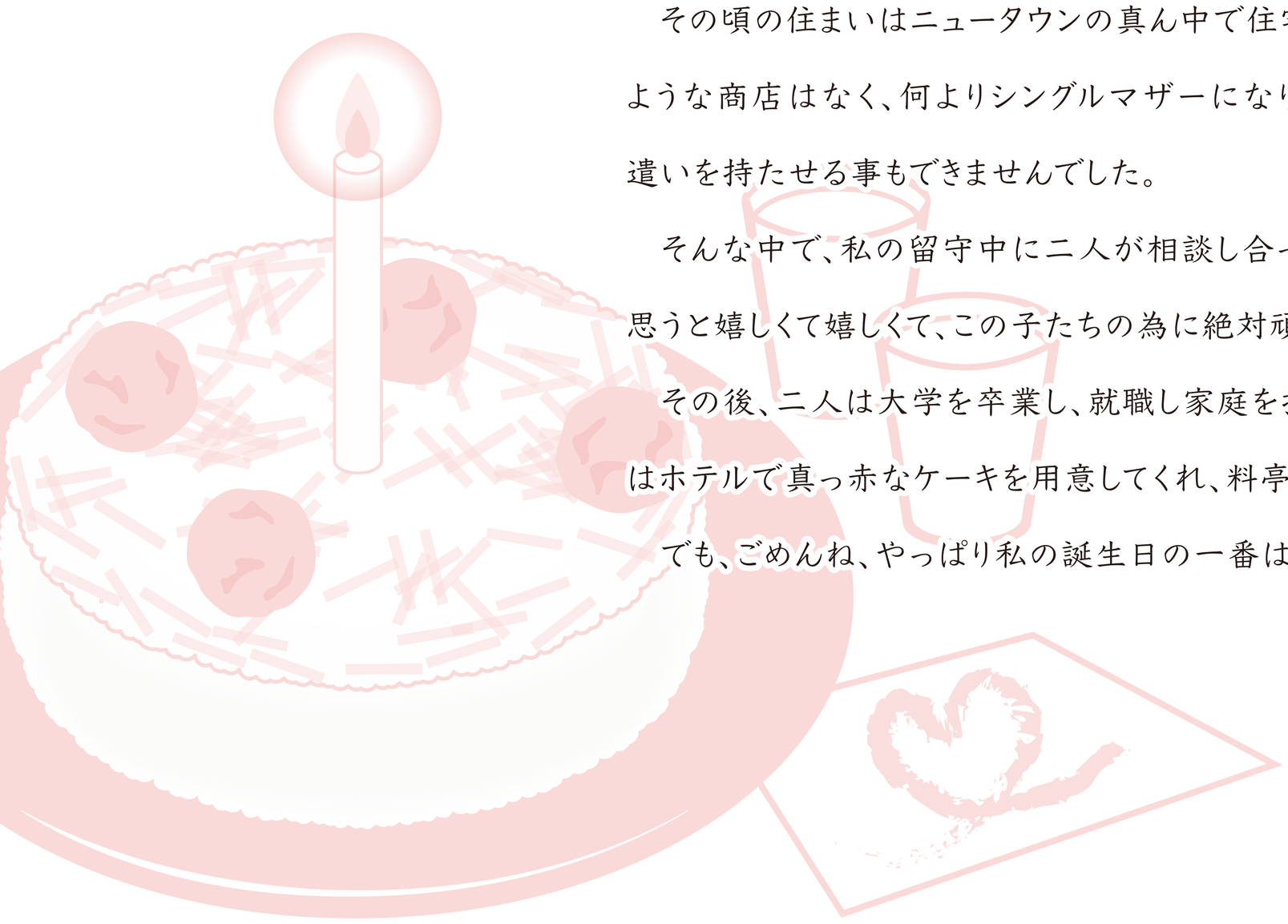
そんなある日、授業を終えて戻ると玄関に娘が立って通せん坊をします。はいはい、お母さんは疲れてるのよ、と心でつぶやきながら靴を脱いだ時、ダイニングの電気が消えました。もう、いたずらは勘弁してよ、と中に入るとテーブルの辺りがボ〜っと明るくなっています。

よく見ると、平たい洋皿にご飯をホールケーキの形にして、ふりかけをかけ、梅干や佃煮や漬物、それに刻んだ海苔を飾って、中央にはなんと仏様のろうそくを立てて火をつけています。

びっくりする私に、二人が手拍子を打ちながらハッピーバースデーを歌ってくれるではありませんか。歌い終わり、ろうそくを吹き消して電気を付けると、テーブルには牛乳を入れたコップと二人の手作りバースデーカードと、そして、世界一のバースデーケーキが置かれてありました。

その頃の住まいはニュータウンの真ん中で住宅地域、近くに子供が買い物に行けるような商店はなく、何よりシングルマザーになりたての私には子供たちに十分な小遣いを持たせる事もできませんでした。

そんな中で、私の留守中に二人が相談し合って〝ケーキ〟を飾り付けていたのかと思うと嬉しくて嬉しくて、この子たちの為に絶対頑張ろうと心に誓いました。

その後、二人は大学を卒業し、就職し家庭を持ち社会人になりました。私の還暦にはホテルで真っ赤なケーキを用意してくれ、料亭で古希の祝いもしてくれました。

でも、ごめんね、やっぱり私の誕生日の一番は、あの時のご飯のケーキなのよね。